

多様な人の居場所をつくる

●『カフェ潮の路』—路上生活経験者と地域の人が集う場所

路上生活経験者と地元の人が 交ざり合うカフェ

東京都練馬区、西武新宿線沼袋駅から徒歩10分ほどの場所に2017年4月にオープンした『カフェ潮の路』は、フェアトレードの豆を自家焙煎したコーヒーや本格カレー、家庭的なランチセットが味わえる小さなカフェである。このカフェは、路上生活者の住宅支援を行う一般社団法人「つくろい東京ファンド」によって作られたもの。2階がカフェスペース、1階がコーヒースタンドになっており、1階では路上生活経験者がコーヒーをドリップしてくれる。また、コーヒーの豆を選別し、焙煎するのも路上生活経験者である。2階のカフェには、路上生活経験者が客としており、地元の人と歓談している。

「つくろい東京ファンド」の代表である稲葉剛さんは、長年、東京・新宿を中心に路上生活者支援活動に取り組み、2001年、湯浅誠さんと共に自立生活サポートセンター・もやいを設立、2008～09年の派遣切り問題等に積極的に関わってきた。しかし、原点である路上生活者問題をきちんと見届けたいという思いから、2014年、セーフティネットの



稲葉剛さんと小林美穂子さん

ほころびを繕うというコンセプトの「つくろい東京ファンド」を設立した。

ファンドでは路上生活者にまず住まいの確保を行う「ハウジングファースト」という運動を展開。空き家を利用した生活困窮者のための個室シェルター「つくろいハウス」を開設したが、路上生活者がシェルターに入居し、生活保護を受け、地域のアパートに移れたとしても、本当に自立するためには、住まいのほかに、仕事と地域の居場所が必要である。このことに気付いた稲葉さんと、パートナーでもある小林美穂子さんは、路上生活経験者が地域の人と関われる居場所と働ける人の仕事の確保のため、カフェを開くことにした。

路上生活経験者には高齢者や障害のある人も多く、これまでこうした人は、高齢ならデイケアや高齢者向けサロン、

障害者は福祉作業所といったところに行くケースが多かった。しかし、こうしたマイノリティの人だけを集める施設は、当事者を彼らだけで隔離することにより、社会的に分断し、社会の側からは異質な他者を切り

捨てることにつながってしまう。異質な人が交ざり合い、出会う場をつくりたいということから、『カフェ潮の路』は飲食店の営業許可を取り、対外的にも「カフェ」としてきちんと営業することを目指した。メニューのカレーやランチのレシピはプロから教わり、フェアトレードのコーヒーも質の良いものにこだわった。

来店者同士の関係をつくる

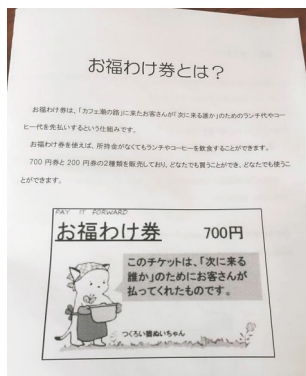
オープンしてみると、飲食店があまりないエリアでもあり、リーズナブルにおいしいランチが食べられる店として、ランチタイムに地域の主婦や近隣の会社の勤め人が多く来店するようになった。最初は事情を知らずに来店しても、路上生活経験者と半強制的に相席にならされて互いの関係ができると、路上生活経験者だからといって決して特殊な人ではないことが地元の人にもわかる。最近では隣接する会社の社員や向かいの薬局の人が毎日来てコーヒーを飲んだり、近所の人たちに宣伝してくれている。

『カフェ潮の路』には「お福わけ券」という仕組みがある。これは欧米で行われているPay it forwardをアレンジしたもので、カフェで飲食した客が「次に来る誰か」のためのランチ代やコーヒー代を支払うというもの。200円券と700円券があり、購入した人、後から券を使った人がメッセージを書き、Facebookで公開されている。

いまのところ、カフェは小林さんがボランティアスタッフと共に切り盛りし、週2日オープン（1階コーヒースタンドは週4日）しているが、今後は徐々にオープンする日を増やしていきたいそうだ。また、カフェでのイベントも開催していきたいとのことである。



『カフェ潮の路』外観



お福わけ券

●『地域リビング プラスワン』—地域の住人で共有するみんなの「リビング」

日常をシェアする拠点づくり

東京都板橋区、高島平団地にある『地域リビング プラスワン』は、NPO法人ドリームタウンが運営している。立ち上げたのは法人の代表理事で現在は板橋区議会議員でもある井上^{あつこ}温子さんである。

井上さんは大学時代、ゼミで高島平地域と大学連携による地域再生プロジェクトに携わった。卒業後、大学職員としてコミュニティカフェの運営や学生ボランティアのコーディネートを担った。井上さんは活動するなかで、同じ地域に住む多様な人たちとの出会いから、地域は人材の宝庫であることを知る。そして身近な地域で異質な人が出会うことにより、多世代交流や国際交流ができること、人と人とのつながりがより豊かな生き方を生む可能性を実感し、生活に根ざした場づくりの企画を始めた。こうして生まれたのが、地域で共有する第2のリビングとしてのスペースを運営するという事業アイデアだ。

地域で共有するリビングとは、飲食店のように、店と客が分かれる場所でも、集会所のような予約制の施設でもない。井上さんはそれを、日常をシェアする場所、世代や国籍、障害の有無を問わず、人々の交流の拠点になり、お互いに支え合い、学び合う場と考えた。そして家



井上温子さん

のリビングにもう1つプラスして地域にリビングを持つこと、毎日の暮らしに何か1つプラスになるような場所、という意味で「プラスワン」という名前を付けた。

ここでは、現在、主として「うちごはん」と「おかえりごはん」という活動を行っている。「うちごはん」は高齢者や乳幼児親子を対象にした昼間の居場所として（高齢者の通所型サービスも兼ねる）、「おかえりごはん」は親の帰宅を待つ小中学生や保育園帰りの親子を対象にした夕方の居場所（学習支援も行う）として、地域のボランティアが「ごはん当番」となって「今日のごはん」を作り、会話を楽しみながら食べるというもの。大人1食約500円だが、「ごはん当番」は食事を無料で食べることができる。このほか空き時間を利用した英会話などの教室も開催している。

地域にもう一つの家族機能を持たせる

参加者の声を見ると、「家で一人分作ると1品のみで済ませがちなので栄養が取れる」といった高齢者や、「飲食店だとくつろげないが、地域リビングでは、子どもが動き回っても優しく見守ってもらえて憩いの場となっている」「仕事と保育園の往復で、地域とのつながりがなかったので、地域に仲間ができたことがうれしい」という母親、「帰りが遅くなってしまうと子どもを一人にしまうので、放課後の居場所としてありがたい」「学校ではうまくいっていないので、子どもに居場所が見つかってよかった」という子どもの親など、それぞれの事情を抱えながら『地域リビング プラスワン』に参加し、共食をすることで、知らず知らずのうちにお互いに知り合いになり、地域



多世代でごはんを食べる「おかえりごはん」



食事の支度の合間に宿題を片づける

の人同士のつながりができていく様子が見えてくる。

井上さんは、普段からそうした場にできるだけ参加し、皆に積極的に声を掛け人と人をつないだり、人見知りでも話をしやすくしたり、得意なことでも人の役に立つ仕事を作ったりという、ファシリテーター役を務めている。「地域はもう一つの家族。日常の楽しいこともつらいことも話せる場所があれば、街は変わるのでは」という井上さんは、『地域リビング プラスワン』で常に皆が一緒にいるわけではないが、ご飯を食べたいと思ったときに気軽に訪れ、子育ての悩みを近所のおばあちゃんに相談したり、お年寄りが子どもと遊んだりといったことが、普通にできるようになればいいと考えている。また、区議として、地域の交流拠点を半径800mの生活圏内に1つずつ作ろうという政策を提案し、板橋区のコミュニティスペースのネットワークである「いたばしコミュニティスペース連絡会」を運営者とともに立ち上げている。

●分断から共有による混住へ

セグメント型居場所の問題点

『カフェ潮の路』と『地域リビング プラスワン』の共通点は、多様な人が、交ざり合う居場所であるということだ。従来、マイノリティといわれる人たちの居場所づくりというと、高齢者向け、障害者向け、LGBT向け、がんサバイバー向け、貧困の人向け、子育てに悩む母親向け、不登校の子ども向けと、いわゆる「普通の人（当事者ではない人）」からの「問題」のラベリングやタグ付けに沿って、それぞれ個別にセグメントされて作られることが多かった。当事者同士で悩みを共有できるという良さも大きいですが、支援やケアを「する」側、何かを提供する側にとって、そのほうが効率的だからという面も大きい。効率は近代社会における重要な価値であった。

しかし、そのように、当事者をラベル別、タグ別に場所を限定するということは、実は非当事者の側による当事者の「排除」にほかならない。効率を重視し、規格化し、同一化することは必要であり、規格に当てはまらないものが交ざらないよう、別々に処理することは正しいとされる。商品ならそれでよい。しかし、人間にもそれを当てはめることで、社会は分断され、社会的孤立を生む。稲葉さん、小林さんはこうした社会の分断化と社会的孤立が「マイノリティは社会のためにはないほうがよい」という極端な考え方を生み出し、ヘイトによるさまざまな事件を起こしているのではないかという。

もう一つ言えるのは、あまりにも同一化されすぎると、実はリスクに弱くなることもあるということである。同じ品種の農作物を大規模に栽培する農場が、特定の病害虫や気候の変化で全滅し、大規模



路上生活経験者も地域の人も一緒に食べる『カフェ潮の路』

な損失を生むということと同様で、人間も同種の人間だけが集まると、同じ考え方で突き進むので、大きな成功を得ることもあるが、多様な方向性を検討したり、試みたりすることができず、危機に陥ったときに極端に脆いということがある。

異種の人間が交ざり合うことは、面倒なこともあるが、実は課題に対する多種多様なアイデアや課題自体を課題でなくすような反応が生まれることにより、レジリエンスを高め、現代のような先行き不透明な時代には、むしろ強さとなる。また、そこに参加する当事者の側も、排除されているときにはスティグマにより自分には価値がないと思い込まされているが、参加してそこで何らかの役割や「仕事（稼ぎだけでなく、勤めとして）」を得ることにより、自分自身の価値を発見することにつながる。

共有による混住の場づくりへ

『カフェ潮の路』では、路上生活経験者がコーヒー関連の仕事をするだけでなく、カフェの常連客でもあり、カフェに花を飾ったり、初めて来た客に路上生活の経験談を語ったり、店の外でカフェの宣伝をしたりする人でもある。『地域リビング プラスワン』では、ごはんを食べにくる人とごはんを作る人が入れ替わり、

デイケアに行けばケアされる立場の高齢者が子どもの面倒を見ることもあったり、元々、ひきこもっていた若者が高齢者のサポートに入ることもある。

ダイバーシティやインクルージョンというと、どうしても、マジョリティ側がマイノリティ側を「受け入れる」ことや、「支援する」こと、「対応する」ことと考えがちである。もちろんどれも必要なことではあるが、むしろ、メジャーだろうが、マイナーだろうが、そこで異種の当事者同士が（誰もが皆何かの当事者であると考えれば）、対等に「交ざり合う」ことで生まれる共感、だけでなく違和感や葛藤、面倒事を経た上で、ケアすることとケアされることが逆転したり、思いもかけない問題解決のアイデアが出てきたり、その場が愉快で楽しい気持ちで満たされたりするということで初めて共生が始まる。つまり『カフェ潮の路』は単なるホームレス支援ではなく、『地域リビング プラスワン』も単なる高齢者支援や子ども食堂ではない。どちらも地域の異種の人間がゆるく「共有」する時間と場所を提供することで、さまざまな人が混住する地域の懐を深め、人々の心の基礎体力をつくる機関になっているのではないだろうか。



多世代が協力して食事を作る『地域リビング プラスワン』